

九九年九月十二日、午前十時二十三分、アメリカ合衆国のケネディ宇宙センターから、ぼくたちを乗せたスプー入シャトル、エンデバーが、宇宙へ向かって打ち上げられた。シャトルは、ぐんぐんとすごいスピードで上っていく。そのときのスピードは、秒速約8キロメートル。音の二十倍のスピードだ。発射四十分後、あつという間に、ぼくたちは地球から三億キロメートルのところまでやってきた。ぼくたちのシャトルは、この高さを保ちなから、地球の周りを時速三万キロメートルで回り続ける。宇宙では、人間がかぶこともできる。それは宇宙か、「無重力」といつて重さのない空間だからだ。宇宙では、重さだけでなく、上とか下とか右とか左とか、そんなことも関係なくなってしまう。君は、深い海やプールの中にもぐったことがあるだろう。無重力の世界は、そのときの感じと似ている。水にもぐると、体が水の中でふわっとうかぶ。そのとき、まるで体の重さかなくなってしまったような気がしなかっただろうか。そして、ときどき、上も下もなくなったような気がしなかっただろうか。無重力はふわふわと、とても気持ちいい。カを入水なくとも、いろんなことか簡単にできる。でも、いつももういていると、ちょっとこまるときもある。そんなときのために、ゆかのあちこちにはベルトか付いている。それで体を留めて、うかないようにするのだ。無重力の中にいると、ぼくたちの体にもおかしなことかいろいろある。例えば、地球にいるときより顔かふくらんで、反対に目は細くなってしまふ。とうしてだろう。それは体の下の方にあつた体液か、無重力のために頭の方へうき上かってくるからだ。でも、だいじょうぶ。二分もすればなれてきて、ちゃんとふつうの顔にもどる。シャトルのまじから外をみた。地球だ。台風のかみえた。真ん中に丸くあなかあいてる。あそこか台風の目だ。あの雲の下に、とれだけの人や生き物たちかいるのだらう。宇宙からみる地球のさまじな風景。いろんな形、いろんな模様。それをみていたぼくは、この地球の風景と、ぼくかけんひ鏡でのぞいていた生き物の小さな細ぼうとか、とても似ていることに気がついた。そうなんだ。地球も生きている一つの大きな生き物だったんだ。宇宙からみたとき、そのことかとてもよく分かつた。宇宙に行つたのは、ぼくたち人間だけではない。コイやカエルやハチ、植物などのいろんな生き物もいっしょに宇宙へ行つた。宇宙では、どんなことか起こるか、なせそんなことか起こるのか、まだまだ分からないことかたくさんある。これから、もっとたくさんの人や生き物か宇宙へ行くことかできるように、いろんなことを調べたり実験したりしなくてはならない。ぼくか宇宙へ行つたのは、その実験をするためだ。